

3 原始・古代

ここでは、この舞鶴に、はじめて人の痕跡をとどめたときから、古代末にあたる平安時代のおわりまでを概観します。その始まりは、氷河期から温暖化し海水面をあげ、朝鮮半島からきりはなされてしばらくたった1万年から1万2千年前のことです。

舞鶴に住み着いた人がどこから来たのかわかりませんが、舞鶴はリアス式海岸の奥にあって、波静かな潟湖（ラグーン）として、多くの入江をもち、由良川という大きな川の流れもあって、古代人がとりつきやすい恰好の土地でした。

大自然への調和を基調とした人びとのくらしは、意外なほどの豊富な知識にもとづくゆたかなもので、戦いのない、家族中心の小さいムラを点在させた平和な時代でありました。太陽や、山や、岩や、木など、さまざまな自然に神を宿らせる考えは、この縄文時代にできあがっていったといえるでしょう。

この縄文時代を変えたのは、大陸から、コメづくりが伝わったことです。コメづくりのために人々は共同で作業をするようになり、その中からリーダーがうまれます。人々や集団と集団に格差が生まれてくると、戦いがひきおこされました。また、農耕のための祈りは、巫女や、村オサによって行われ、彼らは墳墓に埋葬され、死の後も尊崇をうけました。

縄文時代から弥生時代にかけて、ゆたかな生活の痕跡を残す由良川流域の志高遺跡、桑飼上遺跡、桑飼下遺跡、大浦半島の浦入遺跡の発掘によって、畿内からだけでなく、海からも文化が伝播してきたことがわかってきています。『丹後風土記』にある浦嶋子の伝説は大陸との直接交渉を物語っているという説もあります。

この人びとを突如襲ったのが、大和からきた征服者であったと思われます。青葉山にこもって抵抗した陸耳御笠が日子坐王におわれ志高の稲の中にかくれたが、上流の地で討伐される伝説は、この地方が大和朝廷に統一されていったいきさつを物語るものと思われます。「御笠」のカサは、この地方そのものを指しており、6世紀後半から、出現する横穴式石室は、大和朝廷の支配の影響とみられています。

この大和政権下、鉄製農具の普及や灌漑設備によって、農業生産力は急速に高まり、各地で豪族たちも力をつけていきました。また、中国では589年に隋が、618年に唐が成立しました。この巨大な統一国家の成立は、大和政権にも大きな変革を促しました。それは、氏姓制支配体制を改廃して、天皇を中心とする強固な中央集権国家を建設することでした。これが、大化の改新であり、大宝元年（701）制定された大宝律令によって地方も治められていくこととなりました。やがて、律令体制は崩壊に向かい、都を平安京に移して貴族による政治が行われます。

古代のわたしたちの先祖を特徴づけるものとして、海との関わりが考えられます。平安時代にまとめられた「和名抄」には「凡海郷」の郷名がみえます。宮津籠神社の国宝「海部氏系図」や大浦半島などでの製塩土器の分布から、この地は由良川河口域や大浦半島沿岸部とされ、海に関わりが大きい郷とされています。



浦入全景(平成7年撮影)

旧石器時代（1万2千年前まで）

氷河期の頃、ナウマン象やマンモスを追って大陸から日本列島に移ってきた私たちの祖先は、獲物を追って移動しながら寒冷で乾燥した時代を生きぬいてきました。この数十万年前から土器が発明される約1万2千年前（BC 10000年）までを旧石器時代、または先土器時代といいます。舞鶴では、まだ人の痕跡がありません。

縄文時代（BC 10000年～BC 200年）

縄文時代は照葉樹林や落葉樹林から採集した、ドングリやトチなどの堅果類を中心に動物や魚を食料とする、“採集”と“狩猟”の時代とされてきましたが、福井県若狭町の鳥浜貝塚の発掘成果や、花粉学・民俗学・文化人類学など、さまざまな立場からのアプローチにより、これまで考えられてきた以上に文化的水準の高い時代であったことが明らかになってきました。

約1万年も前から植物が栽培され、縄文時代には漆塗り工芸品、植物を使った縄・網・衣服、骨で作ったアクセサリーなどの製作を行っていたようです。私達のまわりにあるさまざまな自然神信仰も縄文時代から始まったと考えられています。

この頃の日本列島は、気候の温暖化によって、海面が数m上昇しており、日本海沿岸には潟湖（ラグーン）があちこちで形成されました。市内の沿岸部には、この潟湖を利用した港があったと思われます。このうち三浜アンジャ島からは、丸木舟の製作に使われたと思われる乳棒状蛤刃石斧^{にゅうぼうじょうがまぐりばせきふ}2点が出土しています。

縄文時代の暮らし

市内で最も古い縄文時代の集落は由良川沿いの志高遺跡で、前期初頭の土器が出土しています。

縄文時代の遺跡集落は、前期に地頭や和江



縄文時代前期の土器

の由良川沿いだけでなく大浦半島の浦入でも集落ができ、中期・後期には西地区で今田、東地区で朝来（田畔）、多門院（荒倉）、大浦地区で平（坪の内）、小橋、千歳、佐波賀など舞鶴全域に広がっていったようです。

桑飼下遺跡からは、当時のくらしぶりがうかがえる遺物が出土しています。炉のある竪穴式住居に住み、ドングリやハシバミの実をアク抜きして主食とし、ヤマイモなどを栽培していたようです。土器作りには植物を編んだ敷物をつかい、女性は黒漆塗や丹塗りの大きな耳飾りをつけていました。



乳棒状蛤刃石斧



縄文時代の耳飾り



埋甕（桑飼下遺跡）



有舌尖頭器（左：女布遺跡、右：小橋遺跡）



丸木舟（浦入遺跡）

幼児が死ぬと土器に入れて家の前の入口に埋め、次の子宝を授かるようにと祈り、家の中に石柱を立てたり、岩版や土偶を祀って、明日の幸せを願った縄文人の心は、今も私達の心の中に生きています。

小橋と女布の^{ゆうげつせんとうき}有舌尖頭器

昭和37年9月10日、大浦半島の小橋区を流れる小橋川の護岸工事中、一人の作業員が槍の先に付ける石器を拾い上げました。これが有舌尖頭器で、約1万年前の人々が、木柄の先に取り付けてシカやイノシシを獲るために使用したものです。奈良県二上山のサヌカイトという石材でできており、このころすでに遠く離れた土地の人々との交流があったのです。また、平成4年には西地区の女布でも有舌尖頭器が発見され、舞鶴での人々の痕跡が少なくとも1万年前にはあったことがわかります。

縄文時代の丸木舟

平成10年、舞鶴湾の入り口にある浦入遺跡で縄文時代前期の丸木舟が1艘発見されました。全体は残っていませんでしたが、復元すると全長8～9mになる日本最大級の大きさで、海際から発見されたことから外海に漕ぎ出したことが分かる初の丸木舟です。縄文時代には黒曜石やヒスイなどが日本の広い範囲から出土することから、海を介して遠くの人々と交流していたと考えられます。浦入遺跡でも隠岐の黒曜石や北陸産の土器なども見つかっています。

この調査では丸木舟だけでなく他の発見もありました。それは縄文時代早期から前期にかけて起った自然災害の爪痕です。約7,300年前に鹿児島県沖合の海底火山が爆発し、日本全国に火山灰が降り積もりました。浦入遺跡でも部分的に残っているところがあり、その火山灰を中心に土器が出土したことから、その頃には集落があったことがわかりました。

弥生時代 (BC 200年～3世紀末)

縄文時代の末、中国南部や朝鮮半島から北九州に移住してきた人達は、水田稲作や金属器製作の技術を土地の縄文人に伝えました。稲作は、数十年で西日本各地へ広まってきましたが、これは縄文人が雑穀栽培型の稲作を知っていたためと考えられています。

舞鶴の稲作は、まず、由良川沿いの志高から始まりました。その後、由良川流域はもちろん、女布や平などの地域にも集落ができ、弥生時代の末頃には10か所以上の集落が成立して、水田の開発は周辺部へと広がっていきました。

弥生時代の暮らし

志高遺跡には、自然堤防という好条件のもと、弥生時代を通して人びとの暮らしがありました。

最も集落が大きくなったのは、弥生時代中期(約2000年前)のことです。人びとは円形の竪穴式住居に8～10人の家族で住み、10家族くらいで集落を構成していたようです。

農閑期には共同で水路を掘削したり、石包丁や石斧などの道具類、対立する集落との戦争に備えた石鏃や石剣などの武器、管玉や勾玉といった装身具類、弥生土器の製作などにはげみました。この弥生土器作りは女性の重要な役割でした。



銅剣形石剣 (志高遺跡)

豊作を願う春のまつりや、収穫を祝う秋のまつりには銅鐸が使用され、悪霊を祓うためには銅剣を模した石剣が使われました。これらのまつりを司るのは、ムラの有力者の重要な仕事だったのでしょう。

家族が死ぬと、集落の周辺につくられた共同墓地に方形周溝墓という、四角く溝を巡らせた墓に埋葬していきました。この葬法は、南の淀川沿いで行っていたのをまねたものでした。なかでもムラの有力者とその家族は、その頃、山陰地方の影響を受けた「貼石墓」とよばれる大きな方形の墓に葬られました。貼石は花崗岩がほとんどで、舟に積んで由良川を運んできたのです。弥生時代も終わりに近づくと対岸の山の尾根を削った方形台状墓という墓に葬られました。



貼石墓 (志高遺跡)

古墳時代 (3世紀末～7世紀)

ムラを見おろす丘陵地や山裾、交通の要所に、前方後円墳に代表される大きな墓が築かれるようになりました。由良川下流域を見渡す山の上にも弥生時代から古墳時代へと変わる頃の墳墓が築かれています。その立地は由良川の水運を掌握した首長の墓とされます。人々は血縁を中心とした集団をつくっており、古墳は一族を代表する族長の墓なのです。そして各地の族長に氏姓を与え、つぎつぎにその支配下においていったのが大和朝廷でした。

切山古墳の被葬者

昭和26年に境谷の丘陵地で発見された切山古墳は、4世紀後半に築かれた舞鶴で最古の大形古墳でした。古墳には凝灰岩製の組合式石棺が使われ、真赤に彩られた棺内には人骨と共に、鉄剣・銅鏃^{どうぞく}などが副葬されていました。凝灰岩は丹後半島に求めたと考えられることから、伊佐津川流域を支配していたこの王は、丹後の巨大古墳の主との間に政治的関係を結んでいたことがうかがえます。



大波7号墳

300基をこえる古墳

6世紀の後半に造られた妙見山古墳の副葬品をみると、鉄製の武具や農具、金環などがあり、農民の中にも小さいながら古墳を残すような有力者が現われたことがわかります。

舞鶴市域には、300基をこす古墳が知られていますが、なかでも78基からなる朝来の大波・奥原古墳群は特徴的で、6世紀後半から7世紀前半の間に、これだけ多くの古墳を造ったのは近隣地域でも珍しく、朝来谷にいた集団の特殊性を表しています。

また、三浜・田井・白杉などの海岸部にも横穴式石室を用いた古墳が確認されていますが、これらの被葬者たちは、海と深くかかわりをもった一族の長^{おさ}と考えてよいでしょう。舞鶴最初の石室が浦入西2号墳であることや最大の石室が白杉古墳であることから、その勢力の大きさがうかがわれます。

5世紀から6世紀にかけて、日本には多くの渡来人がやってきて、灌漑水路^{かんがい}、須恵器などをつくる高度な技術を伝えました。舞鶴でも湾口に5世紀前半に技術者集団が住んでいたことがうかがえます。浦入遺跡で見つかった鍛冶炉^{かじろ}は最先端の技術である鉄加工がおこなわれていたことを示しています。また、その南には鏡や玉の他にも大量の鉄を使い航海の安全を祈った千歳下遺跡があります。出土遺物の中には大陸からもたらされた破鏡^{はきよう}や鑄造^{ちゆうぞう}の鉄斧があったことから日本海に開けた窓口であったことがうかがわれます。



凝灰岩製の組合せ式石棺（切山古墳）



千歳下遺跡出土玉類

奈良時代 (710年～783年)

都(奈良)では、大化改新、壬申の乱^{じんしん}を経て天皇と皇族中心の律令政治が始まっています。地方には、中央貴族が国司として着任し、地方豪族は郡司に任命されました。当時は、条里制という土地の区画整理が実施され、一辺の長さ6町(約654m)四方を一区画(里)とし、これを36等分したものを「坪」といいました。人民にこの区画を与えて土地を耕させるためです。舞鶴市内の60か所の中ノ坪、東坪といった小字は、この条里制のなごりの可能性があります。農民は土地を与えられ、そのかわりに税を納めました。舞鶴での様子はよくわかりませんが、都から当時の木簡に「加佐」と書かれていると考えられるものが5点みついています。舞鶴もまた、律令政治の中にくみこまれていたであろうことは推測されます。

丹後国の成立と加佐郡

和銅6年(713)丹波国から加佐郡を含む5郡が分割されて丹後国が置かれました。加佐郡とは、現舞鶴市域と福知山市大江町域、宮津市由良を含む地域を指します。

平安時代にまとめられた『和名抄』には、志楽・棕橋・大内・田辺・凡海・志託・有道・川守・余戸の各郷があったことを記しています。

加佐の地名は、法隆寺旧蔵の御物金銅観世音菩薩立像の像の中に刻印された銘文中に「笠評君名□古臣」とあり、これに続いて「辛



加佐郡の郷名(『加佐郡誌』より)

亥年」とあります。この辛亥年は白雉2年(651)と考えられていることから、これが最も早いものとされています。尚、大宝律令制定(701年)後、評から郡に表記方法が改められました。藤原宮(694～710)からは「加佐」と推定される木簡が5点みついています。

木簡

地方から都に運ばれる調や贄(天皇への貢納物)には、木簡という荷札がつけられました。文字を書いたのは郡家の役人達です。写真の木簡に見える白薬里は現在の志楽地区から大浦半島南西部にかけての地域と考えられ、久己利魚^{くごり}は「かわはぎ」の一種、腊^{きたい}は干物のことです。

また、「□□郡志宅里猪食部装白米五斗」という志高地区周辺に関する木簡も平城宮跡から出土しています。

都の記録

この時代、舞鶴に残る文字は、出土遺物に書かれた「□寸」「□守」「神□」だけです。

しかし、『続日本紀』や『正倉院文書』には飢饉がおこり、援助が行われたことや、棕橋部乙理という人の奴が、稲一千束と引き換えに都に進上されたことなどが書かれています。このことから、人が売買されていたことや、稲がお金であったこと。稲は手刈りで、握った一束が単位であったことなど、いろいろなことがわかります。

丹波国加佐郡白薬里大贄久己利魚腊一斗五升和銅二年四月(藤原京 出土)



平安時代 (784年～1191年)

8世紀の中頃から律令制度が乱れはじめ、延暦13年(794)、人心を一新するために、平安京(京都)に遷都を行いました。舞鶴にどの程度の影響があったのかわかりませんが、何より都が近くなったことは間違いありません。『和名類聚抄』には都まで、「上りで7日、下りで4日」とあります。上りは年貢の米や反物を積んで行くので時間がかかったのでしょう。

奈良時代の天平文化は、唐の強い影響をうけた外来の文化でしたが、平安時代中頃になると貴族たちは唐風の文化を日本の風土や生活にあった文化に変えていきました。かな文字の普及は、紫式部の「源氏物語」や清少納言の「枕草子」などの女流文学を生み出し、貴族の住いには、庭園を取り入れた寝殿造の様式が完成しました。これらを総称して国風文化といいます。舞鶴に遺されている仏像や神像、絵画(仏画)は平安時代のものが最も古いものです。

仏教文化

飛鳥時代から続く薬師信仰に加え、平安時代には観音信仰が大きく広がり、現在の西国三十三所霊場のもととなる、霊場巡りがはじまりました。また、平安時代末期には末法思想をもとにした浄土信仰がひろがりました。これらの信仰と比叡山と高野山で成立した天台と真言の密教や、山岳信仰などが結びつき、薬師如来、十一面観音、阿弥陀如来といった仏像の名品が生まれました。その頃から続く舞鶴の古刹には、国宝や国の重要文化財に指定されているものがあります。多禰寺は、用明天皇第3皇子麻呂子親王を開基とし、金剛院は、薬子の乱に連座し廃太子となった高岳親王開基、松尾寺は、海人開基で、鳥羽天皇や花山天皇の篤い信仰をうけたと伝えます。また、圓隆寺は天台座主となった皇慶上人が中興したとされています。



国宝 普賢延命像(松尾寺)



重文 阿弥陀如来座像(圓隆寺)

経塚

平安時代の中ごろ、災害や飢饉が多発しました。これは仏教が衰える末法の世がやってくるからだと思われていました。そこで經典を容器に入れ土中に埋めて後世へと保存しようという経塚が造営されました。その後、往生祈願や追善供養のために盛んに造営されました。舞鶴では、油江や天台などで経塚が造営されました。



経 塚

神社

延長5年(927)に選上された『延喜式』のいわゆる神名帳によると、加佐郡11座として、奈具神社、麻良多神社、大川神社、伊知布西神社、倭文神社、高田神社、弥加宜神社、日原神社、三宅神社、笑原神社、阿良須神社の名がみえます。これらを式内社と言いますが、なかでも大川神社は朝廷から絹の布や、真綿、



大川神社社殿

糸などを贈られた加佐郡唯一の神社で、鮭に乗ってきた霊神を祀ったと伝わっています。このほか、高倉神社(長浜)や、八幡神社(河辺中、平)、宮谷神社(福来)なども成立が古く、平安時代後期の神像が伝わっています。

人々のくらし

奈良時代の初め頃、志高遺跡では里長階級の家や倉庫はすでに掘立柱建物となっていました。村人の大半は依然として竪穴住居で暮らしていました。しかし、奈良後期から平安初頭には、村人の家も柱間が2間×3間ほどの掘立柱建物にかわっていき、米を納めた高床式の倉庫群が並ぶ、この地域の中心的な村になっていきました。ところが、「大同2年(807)、丹後国加佐郡百姓に租・調を免ず。水害殊に甚だしきを以て也」と『類聚国史』の記事があるように、大洪水に見舞われることもありました。浦入遺跡では、奈良時代後半から製塩や鍛冶の大規模な生産が始まっており、生産活動の拠点として人や物資が集まったと考えられています。9世紀の製塩土器支脚には「笠百私印」と刻印されたものがあり、この地で「笠氏」が存在していたことと、塩生産に笠氏が関与していたことが確認されました。平安時代末期にも若狭湾沿岸では盛んに塩生産がおこなわれました。



「笠百私印」刻印製塩土器(浦入遺跡)